

2 ヘンリー王の狩り

ヘンリー王はウォルサムの森に立った
明るい五月の朝のこと
キリストの生誕から時経て
千五百三十六年目のこと

ヘンリー王はウォルサムの森に立った 5
新緑萌え出る 光と影の中
家来や獵犬たちは 今か今かと気もそぞろ
だが王は 前足で地面を叩く馬に跨がろうとしない

「陛下は何をお悩みで
不機嫌そうなご様子で行ったり来たり 10
どんな獲物を追われる時も
こんなにお足が進まないことなどなかったのに」

歩いては立ち止まり 歩いては向きを変え
時折 何やらぶつぶつひとり言 15
ベルトを締め直したり 顎鬚をグイと引いたり
だが ひと言も発しない

二匹ひと組に繋がれた獵犬たちは 辺りを嗅ぎ回り
あるいは 草地の上にゴロリと横たわり
獵犬番たちは馬の腹帯や馬勒を弄りながら
恐々と王を盗み見ていた 20

若い廷臣たちは 仲間内で
小声で笑い おしゃべりしていた
あるいは 花をつけた山査子の枝を
何食わぬ顔で折ったりしていた

ヘンリー王は倒れたオークの木に腰をかけ 25
いつもに増して暗く異様な目付きをしていた
額に皺を寄せ 唇を噛んでいた
そういう時は危険であった

ローマ教皇と皇帝のことを考えているのか

彼らを否定し 逆らったことを

30

それとも 己が足元の裏切り者たちが

陰謀を企んでいるのか ならば 奴らに災いあれ

突然 みなみかぜ 南風に乗って

遠くから でも はっきりと

一発の大砲の音が聞こえ

35

イングランド王は飛び上がった

「我が馬を」 王は叫ぶ 「さあ 猎犬いぬどもを放て」

皆のものが一齊に馬に跨またがった

一頭の牝鹿めじかを目撃 人馬と猎犬いぬ一齊に

怒り狂った悪魔のごとく襲いかかった

40

牝鹿めじかは素早く木立や空き地を逃げ回り

それに負けじと追っ手が追跡

森中の四方八方から

狩する者たちの角笛と叫び声

獵犬いぬたちが一齊に道を空け

45

馬の乗り手たちが前に出た

五月に牝鹿めじかを殺すは容易たやすきこと

そばに子鹿がいなければ

恰幅よくずっしりした王は

力強い馬に跨またがり

50

一陣の突風の如く

群葉茂ぐんようる林を抜けた

家来たちがさっと道を空け

王は全力で 雄叫びあげて疾走した

長らく苛々と待たされていた馬も

55

今こそ威勢よく 鼻息荒く嬉々としていた

牝鹿めじかは仕留められ 皆の者は

大瓶のワインとコーニッシュパイに舌鼓を打った

「聖ジョージよ 守り給え 気高き主君きみを

時には激しやすく 性急過ぎることもある主君きみを」

60

ノーフォーク卿以外には 知るものはあまり無かった

なぜ 遠くの一発の銃声で
遠くの唸るような大砲の音で
突然鹿狩りが始まったかを

先程まで憂鬱で不機嫌そうだった国王閣下が
なぜ かくも楽しげになったかを
城の塔から轟いた大砲の音は
美しきアン・ブーリンの首が落ちた合図であった

65

ヘンリーがいつも口づけしていたアンの首は
血染めの斧で切り落とされた
二人の間の幼い娘エリザベスに
アンが会うことは二度と無い

70

国王は愉快げに西の方に駆け去る
ほくそ笑みはいや増すばかり
明日は己が婚礼の日
美しきジェーン・シーモアと結ばれる日

75

ひ
陽は傾き 野鳥の鳴き声が
エッピングの森に囁する
木立から空き地へ 光と影を縫って
めじか
牝鹿の一団が飛び跳ねている

80

(山中光義訳)